

## 1. 本実践がめざすもの

本実践は「よりよい生活を創り出すために、学んだ生活の知識と技能を自ら実践しようとする子どもを育む学び」を研究テーマに、複眼的思考のもと家庭科の見方・考え方を働かせ、生活への実践につなげていくことを目指して進めていた。

衣生活分野の学習では衣服の着方を取り扱うが、児童は当たり前のように衣服を着用しているものの、その詳細、例えば、どんな素材できているのか、洗濯しやすいのか、汗をかいても快適なのか、については十分な関心を持っているとは言い難い。また、制服があれば諸条件を考えて衣服を選ぶという場面もかなり減ってしまう。そのため、簡易実験で衣服素材の特性を確認し、感覚的に理解していたことに客観性を持たせ、十分な根拠を示しながら快適な衣服の選択を考えさせようとしていた。

## 2. 本実践から見えてきたもの

本実践の最終的な目的は宿泊学習の場面に応じた「快適な着方を考える」ことであるため、衣服そのものへの関心を高め、客観的な事実に基づき快適であることを児童自身に判断させる必要がある。前時に行った吸水性実験、通気性実験、衣服の形状や下着の有用性から、児童自ら確認できた客観的事実とこれまでの生活経験を照らし合わせ、「快適な着方」を考える根拠を持つことができていた。これらの根拠をもとに、本実践では具体的な思考・判断ができるよう10月実施予定の宿泊体験学習の場面に応じた快適な着方を検討させた。なお、いずれの児童も、宿泊体験学習ではある程度動き回ることを、森林での散策、キャンプファイヤー、体育館でのレクレーションなど場面によって活動量が異なることは想定できていた。

話し合いの場面では、「動き回るなら汗もかくから、汗を吸う素材がいいよね。実験のとき、気持ち悪かったよね。」「ポリエステルはダメだよ、やっぱり綿がいいよ。」といった前時の実験から得た知識を踏まえた発言だけでなく、「歩くと暑くなるから半袖がいいけど、日陰もありそうだから寒く感じるかもしれない。上着があったほうがよさそう。」「外歩きなら足元に気をつけておかないと怪我をするから、運動靴に靴下、やっぱり暑くても長ズボンかな…」のように様々な角度から設定された場面を読み取り、「快適」を理解しようとする発言がみられた。

グループ発表では、同じ場面を考えていても視点が異なれば少し違った快適の条件と着方の提案がでてくることにも気づき、暑い時期は涼しく、寒い時期は暖かくといった基本的な「快適」から、より踏み込んだ「快適」を考え、判断することができていた。

## 3. 今後の展望

家庭科で取り扱う家庭生活における諸活動は、活動できているからといって十分理解できているとは限らず、その活動の主体となり初めて実感を伴った理解ができることが多い。生活経験が乏しいほど、主体となる体験・疑似体験は重要になる。今回の「快適な着方を考える」もその一例である。衣服の着用が当たり前であるからこそ、改めて考えてみると知らないことが多く、その知らないことを実験で確認できているからこそ、自信を持って活発な話し合いが行えていた。ただし、今回の提案通りの「快適な着方」を実行すると宿泊体験学習の荷物がかかなり大掛かりになってしまうため、荷物削減のための衣服の組み合わせを検討する時間を最後に設けてもよかつただろう。

家庭科は科学的視点で家庭生活を捉える教科でもあるので、実験や実習を上手に取り入れ、明確な根拠を持った思考・判断ができるよう、他分野での実践にも期待したい。